

# Opinion

オピニオン：このページは会員の意見を紹介するページです。

## 大分県湯布院町と東京の町

杉並区 会員 浅見 勇喜知

7月に一新塾の一期生の人達と大分県の「村起こし運動」の実態を見てきた。東京都の市区町村と圧倒的に規模の違う大分県の市町村を比較することは見当外れと言われるかも知れないが、東京の再生を考える上で重要なヒントがあったように思う。

東京都の市区町村は子細にみるとそれぞれ、異なった特徴を持っている。企業で日常の大半を過ごしている人は、特に男性は、どうしても大きな共通のところに気をとられて、それぞれの町の、商店の、小さな零細企業の、鋭い個性を見失ってしまう。

戦後50年、他の市町村が近隣の市への合併に活路を見つけたのに対し、大分県の市町村は険しい山々に隔てられ、険しい経済環境にさらされ、頼る近隣もなく、自ら活路を見出さざるを得なかった。

昭和37年に映画助監督の職を捨て、東京から湯布院町の日本旅館亀の井別荘に戻った中谷健太郎氏は、そのころ大水が出れば客を背負って逃げ回ったという。東京では、学生等が安保闘争に敗れ、一方一般都民が東京オリンピックと続く好景気に狂喜していた頃のことである。このあたりに、今日の東京都の町と大分県の湯布院等との自治の姿勢の基本的差が生まれている。

昭和30年後半までは、日本中の市町村が戦後の復旧に向け、同じような苦難の戦いを強いられた。

しかし昭和30年後半から昭和50年代の生き方が、市町村が自立するか否かの岐路を分けた。

都市型の経済発展を拒絶し自立の道を選んだ大分県の小さな町には、町民がいた。リーダがいた。そしてそれを支える行政もあった。「市民9, 行政1」が秘密、湯布院町の行政の要の課長で、昭和58年に始まった平松知事の「豊のづくり塾」の一期生の実感である。

一方、東京はどうか？東知事の時代はいうに及ばず、せつかく迎えた美濃部知事の革新都政も大半の市民が参加せず、教理中心のイデオロギイ闘争に明け暮れたのである。

結局、欧米の先進国が17-18世紀に経験した市民革命が日本の明治維新にはなく、昭和20年の敗戦にも起きなかった。

第二次大戦で沢山の親兄弟、同胞を失い、山河のみ残された危機も、市民が自立する好機も、先進国の歴史を、イデオロギイ論争の教理として理解し、市民達が現実の問題として自から葛藤することもなく過ごしてしまった。昭和25-8年の朝鮮戦争争気に救われ、外力と中央政府に依存するの安直な道を選び、自分を見失った。

話を今に戻すと、今年6月の都議会本会議の傍聴を勧める地下鉄の宙吊り広告を見た方もおられるであろう。傍聴券は本会議開催の一時間前の正午から受け付けが始まるが、2階のロビーが100

人を越える人でむせ返った。二日目は異臭すら仄かに漂っていた。この日は新宿界隈のホームレス達が銭湯に入り、身なりをこぎれいに正し、傍聴券の列の先頭に並んだのである。流れが変わるか？しかし事態はそんなに甘くはない。美濃部・鈴木知事の時代には、或議員が質問に立つと、議席に背を向けた守衛にも議場の緊張が伝わってきたという。即ち今の感動のない議会はその後の鈴木都政の時代とバブルと共に、市民の無策により作られたものである。

冒頭に説明した湯布院町の現在の課題の一つは、「本籍が町にない所謂”新町民”」が3割りに達したことであるという。彼等は何も意見がない代わりに、積極的に協力もしないそうである。東京都では、それに相当する都民が恐らくとつとつに9割を越えていると思うが、湯布院は、これからそれに取り組みむという。

大分が昭和20年代から取り組んだ市民としての自助努力を、東京都は経済的に恵まれている故に、放置して今日に至ったといえ言過ぎだろうか？陸上競技でトラックを何周も省略し、あたかも先頭に行く気分で走って居るのが東京都民ではないであろうか？求められているのは町の規模に関係なく市民の自助である。湯布院の如く20-30年持続する地道な努力である。